

# 児童ドッジボールチームのマネジメント

當 村 洋一郎 木 村 公 喜

## 1. 緒 言

わが国では、児童がスポーツ集団に所属して活動するには、地域のスポーツクラブやサークル活動、総合型スポーツクラブ、学校単位によるサークル活動などに加入する手段がある。福岡県福岡市早良区I校区では、陸上クラブ、ミニバスケットボールクラブ、剣道クラブ、少女バレーボールクラブ、少年野球クラブ、およびドッジボールなど21サークルがある。このうち、ドッジボール種目は、学校現場においても教育の題材にしたりされている<sup>1)</sup>。

本研究の目的は、地域における児童ドッジボールチームの実情を表し、その管理内容を検証することである。

## 2. 研究方法

福岡県福岡市早良区内の児童ドッジボールチームを題材とし、以下の項目について調査し、学術的分析を施した。

- (1) ドッジボールクラブの現状
- (2) 活動内容
- (3) ドッジボールを題材とした研究とマネジメント
- (4) クラブ組織運営成果
- (5) 課題と今後

### 3. 研究結果・考察

#### (1) ドッジボールクラブの現状

サークル活動を円滑に遂行するために、会員から委員を選出している。任期は1年間である。委員には、代表1人、副代表2人、会計1人、会計補佐2人、書記・渉外1人、監事1人、各学年世話係を各1人、およびチームサイドとして、監督1人、コーチ2人、コーチ兼公式審判員1人である。各配属の役割は、代表がクラブの円滑な運営のための総合的な調整、公式戦などの受付と準備調整係の設置、会員への連絡（一斉メールにより発信）、遠征時の配車（会員保護者の車を使用するときには、車だし可能な保護者の確保と選手の配車割）の手配を行っている。副代表は、代表の補助的役割で、練習試合と公式戦の際の選手への昼食手配を実施している。また、クラブ内の合宿計画、宿舎の手配、合宿時のスケジュールを行う。会計は、会員からの会費徴収とその管理と監督や代表の申請による会費からの出費を行っている。書記と渉外は、会員総会と保護者会の時の記録が主な役割である。また、監査役を配置し、会員費用の収支に虚偽がないかを確認している。

サークルのスタッフは、監督とコーチで構成されている。監督は、公式試合や練習試合の年間計画作成、練習試合の調整、練習メニュー作成、所属メンバーの管理、技術指導、および戦術指導を行う。コーチにおいては、シニアチームコーチ（5・6年生）とジュニアチームコーチ（4年生以下）がおり、各コーチは監督と技術練習指導、コンディショニング、フィジカルトレーニング、および応急手当などを図っている。また、卒業生が臨時コーチとなり捕球練習メニューが組まれる事もある（写真1）。

#### (2) 活動内容

練習の確保のために、公民館サークルに所属するクラブが、毎月1回会合を実施し、体育館の使用日程を調整している。チームは、規約に基づき運営されている。本クラブでは、主に以下の通りである。



写真1 OB参加による捕球練習

- ①ドッジボールクラブは、公民館サークルに所属。
- ②公民館主催の行事などは全員で協力する。
- ③ドッジボールクラブの運営は、会員保護者で協議し、全員で協力する。
- ④部費は以下のようにする。部費は、1ヶ月2,000円（前払い）。
  - ※部費については、毎年度の決算報告を受けて、検討する。
  - ※部費は、基本的に3ヶ月以上まとめて支払う。（休部1ヶ月500円）
  - ※休部する時は、前もって監督に届出をする。
  - ※怪我の場合は別途対応する。
- ⑤練習及び試合は、小学校の体育館または体育館前で解散する。  
自宅までの子供たちの安全については各家庭で十分配慮する。
- ⑥入部は基本的に小学3年生以上とする。
- ⑦練習時の水分補給について  
練習中に脱水状態にならないよう配慮しながら、水分補給を行う。水分については各人が準備するが水分の足りなくなった子は、ペットボトル（500ml）を、その都度渡し、1本につき100円を支払っていただく。
- ⑧試合は、基本的に保護者の車で移動する。
  - ※県外などへ行く場合は、飛行機や鉄道、バスを利用する。
- ⑨休む場合は必ず連絡をする（特に試合に行けない場合は早めに）
  - ※できるだけ本人から監督に直接言うこと

⑩審判について

3月に審判講習会が実施される

高学年保護者から順次2～3人講習会に参加する。

⑪ゼッケンについて

ゼッケンは当番を決めて全員分を洗う。

⑫途中入部について

途中入部の最初の部費は20日までは入部した場合は、1ヶ月分の部費をいただく。20日以降は、翌月からの支払いにする。

⑬練習、試合の時のお世話について

練習については当番を決めず、行けるときにいって、子どもたちの世話をする。試合には、交代で参加して、運営の手伝いや子どもの世話をする。

⑭試合中・練習中・移動時において、事故等が起ころっても、監督コーチ・お世話している保護者・車だしをするドライバーの方に責任はかからない。

保護者のかかわり

①練習：練習がスムーズにできるように、春秋冬は1人、夏は2人体制で手伝う。

- 日誌・月別利用報告書の記入、体育館倉庫に保管されている用紙に記入する。
- 突き指などの手当てを行う。倉庫に保管されている救急箱から必要な用品を使用して手当てを行う。
- おしぼりの準備（夏のみ）夏練習に子供たちが各自ハンドタオルと氷を持参する。氷を使ってハンドタオルを冷やしておき休憩時に渡す。
- 監督・コーチの依頼によるボール拾いなど指示に従って行動する（写真2）。

②試合：会場で状況により手伝う。車出す保護者と交代制の登板担当保護者、プラス付添者、手伝いと応援を行う。



写真2 保護者による練習中の管理

- 送迎のための車出しと別に車出し保護者を事前に募り調整する。子ども達は安全面に配慮し後部座席のみ助手席には大人が乗車する。ガソリン代や高速代は規約に準じて支給する。
  - 駐車場整備：会場駐車場で整理、誘導、案内を行う。
  - ラインズマン：資格不要、練習試合などで経験を積んで参加する。
  - おしぼりの準備（夏のみ）他。
- ③校内練習試合：招待試合のため、原則保護者全員で手伝う。
- 朝の駐車場整理、会場準備、トイレ清掃
  - 審判・副審判、ラインズマン、本部
  - 日誌、月別利用報告書の記入
- ④校外練習試合：他校での試合の手伝い
- ⑤送迎のための車出し、ラインズマン、おしぼりの準備（夏のみ）を行う。
- ⑥ゼッケン洗濯：試合後輪番制で持ち帰り洗濯を行い、速やかに持参する。
- ⑦その他：合宿やレクレーションなどについて別途連絡を行う。

### （3）ドッジボールを題材とした研究とマネジメント

幼児の指導教育にいかすために、ドッジボールを題材とし「わかる」指導と「できる」指導を検討した研究など、教育を視点にドッジボールを扱うケースもある<sup>2)</sup>。第一回全日本ドッジボール大会に参加した男子選手の体格

(身長・体重)は、全国平均と等しく、機能面(握力・背筋力・立位体前屈・仰臥上体そらし)においては全国平均に満たなかった<sup>3)</sup>。近年ドッジボールの競技化が行われ、1980年に日本ドッジボール協会が公式ルールを発表した。小学生に全国大会も開催されている。当初の全国大会時の攻撃パターンは、5アタックルールの中、アウト率の高いパターンは、パス回数を多くして内野を多く動かし捕球体勢を崩すこととなっていた<sup>4)</sup>。小学生ドッジボール全国大会優勝チームにおける8ヶ月間の練習期間の前後で、肺活量、反復横跳び、握力、背筋力、垂直跳び、全身反応時間を比較した報告では、平均年齢11歳の選手たちについて、背筋力、握力、垂直跳びが全国平均値よりも有意に高く、8ヶ月間の前後比較では、絶対値による比較では肺活量、握力、垂直跳びで顕著な増加が認められたが、身長や体重の身体的要因を除いて比較すると有意差は認められなかったとしている<sup>5)</sup>。ドッジボールをテーマにした研究では、教育的効果をみる者と、投げる動作についてのものと大きく分けられる。教育的効果を検証する研究の中にマネジメント要素を含むことがあり、選手とスタッフ、保護者など周りの者たちとの関わりなど、その環境に関連することが選手、特に子どもたちの育成の強く関わるものとなっている。前述した、チームに対する保護者のかかわりは、多少過保護感が否めない。これは、近年の傾向であり、スポーツ界に限られることではない。また、指導者も競技志向が強くなるにつれ、勝負にこだわるあまりに、教育的配慮が薄れる傾向が見受けられる。

小学校低学年では、腕を伸ばしたままの捕球技術から、中学年では捕球時に引く動作やボールに面をつくるようになり、高学年でスムーズなものになる<sup>6)</sup>(写真3)。幼児の投げ動作の発達には、顕著な男女差が観察され、このことは女子よりも男子がドッジボールを含む遊びの中で経験値が多いことが重要な因子と考えられた<sup>7)</sup>(写真4)。小学生ドッジボールにおいて、技術と戦術に分けこれを検討する研究もされている<sup>8)</sup>。



写真3 捕球動作をメンバー同士で確認



写真4 女子児童による投げ動作

#### (4) クラブ組織運営成果

本ドッジボールクラブは、2005年に現監督が小学校に赴任した時に発足した。発足当時は、クラブ組織はなくドッジボールを行いたい児童が集まり、定期的に練習を行っていたが、対外試合は実施されずにいた。2006年頃より6年生の保護者が練習試合の移動のための車だしを行うことで関わりをもった。また、他のチームと練習試合を行うことによって、クラブメンバーの意欲も高まっていった。このような期間を経て、2008年にそれまで管理運営等が、監督と一部の保護者で成されていたものが組織化されたことで、監督は、本来の指導に専念できるようになった(写真5)。2009年から、組織の確立や定期的な役員と監督との会合を実施し、運営内容の確認などを行った。主



写真5 練習中の攻撃メンバーへの指導場面

な会合内容は、監督・コーチ・代表による練習試合計画、対外試合の選定などを、メンバーの体力状況を配慮しながら検討するものであった。

組織化されたチームは徐々に成果をあげ、2009年ごろには県大会で上位入賞に名を上げる強豪チームまでに急成長し、2010年及び2011年には県代表として九州大会へ出場するまでに至っている。

コミュニティスポーツの運営などのささえるスポーツの意義や価値が見出されている<sup>9)</sup>。

名古屋市では、教育委員会に依頼があったすべての学校に指導者を派遣している。外部指導者登録システムと教育サポートネットワークを立ち上げ、インターネットを通じて人材の検索や問い合わせができるようになっている。しかし、現状はこのシステムを活用しているよりも、教育委員会を通じて学校側と外部指導者との調整がされているのがほとんどである<sup>10)</sup>。外部指導者の導入には地域性があり、大都市に比べ静岡県や新潟県では人材確保が困難になっている可能性が指摘されている<sup>11)</sup>。文部科学省は、子どもの体力向上に取り組む方法の一つとして学校運動部活動の活用化を位置づけ、平成24年度から実施される中学校学習指導要領では、初めて教育課程との関連を明記した<sup>12)</sup>。医学科学生を対象とした、成績に影響を及ぼす因子については、アルバイト実施が疲労を促進することで意欲を低下させることがみられた<sup>13)</sup>。

進学校、進路多様校、非進学校の3タイプすべてにおいて、部活動参加者

は、不参加者に比べてSMS (School Moral Scale 河村1999) 友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識が高かった<sup>14)</sup>。

### (5) 課題と今後

現チームは、学年ごとに所属人数が偏っている。また、新年度に入会者が極端に少なくなると、部の存続にも関わる。このため、部員の確保が当面の課題の一つである。また、監督は小学校教諭であるため、異動が定期的に発生する。この際の指導者の引き継ぎやその確保が重要なポイントとなる。子ども会行事との相互関連による練習場の確保難や、ダブルブッキングによるどちらに参加するかの検討などの現実も見受けられる。

体調面では、メンバーの怪我や病気、インフルエンザ流行で学級閉鎖時には、練習を自粛した経験もある。

組織面では、保護者間の共通理解、運営費用の確保があげられる。特にチームが強くなっていくにつれ、対外試合が多くなり、かかる費用も増加している。

日本ドッジボール協会加盟チーム数は、ピーク時には2,000チームを超えていたが、その後2007年では1,400チームに減少した。過去に全国大会で優勝を成し遂げたチームの解散もある。大人がドッジボールに携わるきっかけとして多いのは、自身の子どもがドッジボールをはじめ、養育者として関わるためにチームの指導に当たるなどである。審判技術を習得し、子どもたちのチームの帯同審判として大会を支える養育者も多い。また、養育していた子どもが、小学校を卒業して今度は指導者やコーチとしてドッジボールに携わることである<sup>15)</sup>。

少年スポーツ活動において、スポーツ少年団への加盟人数は1997年度に90万に減少したが、2003年度には93万に回復した<sup>16)</sup>。選手養成を主軸とする「競技志向型」とスポーツの普及・振興や子どもたちの心身育成、コミュニティ形成を主とする「地域指向型」と分類するとクラブに対する母親の意

識にはミスマッチが認められた<sup>17,18)</sup>。

ドッジボールは、中学期の総合体育大会の正規の競技とされていないため<sup>19)</sup>、この時期以降に競技継続が困難になり、他の競技などへ移行する。

部活動などの課外活動の運営は変化している。近年の特徴として保護者のかかわりが強くなった傾向が見受けられる。今後、部活動と地域のスポーツ振興活動とが児童のニーズにあった選択肢となるようにする必要性を実感した。また、管理側においてフィジカル面のエビデンスが蓄積された現在では、そのことを熟知したトレーナなどと協力して選手育成を進めるなどが必然と考えられる。さらに指導者は目先の勝敗にこだわらず、児童を将来に導き、卒業生たちがその後どれだけ伸びたかを競うべきであろう。

#### 参考文献

- 1) 杉浦朱美, 藤田公和: ドッジボール指導における一考察. 日本保育学会大会研究論文集(39), 574-575, 1986.
- 2) 口野隆史: 幼児の体育の指導方法に関する研究: “わかる”ことを中心とする指導法と“できる”ことを中心とする指導法を比較して. 日本体育学会大会号(44B), 851, 1993.
- 3) 五日市恭子, 浦田燐子, 志沢千鶴子, 竹内正雄, 西山逸成, 新井重信: 小学生のドッジボール大会参加者の体力および運動強度について. 日本体育学会大会号(43B), 631, 1992.
- 4) 本間正行, 五日市恭子, 浦田燐子, 志沢千鶴子, 竹内正雄, 西山逸成, 新井重信: 小学生のドッジボール競技における攻撃に関する基礎的研究: 第3回全日本ドッジボール選手権青森県大会の場合 (09. 体育方法, 一般研究発表). 日本体育学会大会号(45), 579, 1994.
- 5) 浦田燐子, 志沢千鶴子, 五日市恭子, 竹内正雄, 西山逸成, 新井重信, 本間正行: 小学生ドッジボール全国大会優勝チームの体格・体力について. 日本体育学会大会号(44B), 602, 1993.
- 6) 本間正行: 児童の補球パターン(ドッジボール)について(7. 発育発達, 一般研究B). 日本体育学会大会号(38B), 715, 1987.
- 7) 藤田公和: 幼児のドッジボール投げの動作発達. 日本体育学会大会号(53), 401, 2002.

- 8) 本間正行, 五田市恭子, 浦田燐子, 志沢千鶴子, 新井重信, 西山逸成: ドッジボールの技術と戦術の構造: 日本ドッジボール協会ルールによるゲームの場合. 日本体育学会大会号(46), 550, 1995.
- 9) 山口泰雄: スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性—. 世界思想社, 2004.
- 10) 大勝志津穂: 部活動における人材活用法—名古屋市の部活動外部指導者の取り組みについて—. 東邦学誌, 第40巻第1号, 35-46, 2011.
- 11) 西島 央, 矢野博之, 中澤篤史: 「中学校部活動の指導・運営に関する教育社会学的研究—東京都・静岡県・新潟県の運動部活動顧問教師への質問紙調査をもとに—」. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 第47巻, 101-230, 2007.
- 12) 文部科学省: 「中学校学習指導要領 第1章 総則」2008.
- 13) 栗原由美子, 隈本景子, 桃井 彩, 中野正博: 部活動参加, 不参加による学習意欲度及び成績順位の違い. 第23回バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文, 85-88, 2010.
- 14) 藤原和政, 河村茂雄: 高校生における部活動への参加の有無とスクール・モラルとの関連. 日本教育心理学会総会発表論文集(52), 443, 2010.
- 15) 佐野 司, 松崎茂樹, 宮寺晃夫: 小学生ドッジボールのクラブチームにおける養育者の意識: 子どもの成長に対する教育効果を中心に. 筑波学院大学紀要4, 173-181, 2009.
- 16) 藤原 誠, 堺 賢治: 子どものスポーツクラブ活動に関する研究—試合への出場状況と活動意識—. 愛媛大学教育学部紀要, 51, 121-124, 2004.
- 17) 小松幸円, 嶋谷誠司, 山下昭子, 池田尹雄: 子どものスポーツクラブに対する母親の意識について—横浜のサッカークラブの調査から—. 日本体育学会大会号, 43A, 152, 1992.
- 18) 岩下 聡, 山下昭子, 小滝敏一, 鈴木英夫, 片尾周造, 鎌田 章: 子どものスポーツクラブに関する研究—母親のスポーツクラブに対する意見について—. 日本体育学会大会号, 44, 174, 1993.
- 19) 日本中学校体育連盟 “(財)日本中学校体育連盟”, 2008.